TAMURA SORYU

「近代洋画の開拓者 高橋由一」展の開催にあたり、「東の由一・西の宗立」というべき田村宗立の絵画創造の足跡を、京都国立近代美術館が所蔵する作品・資料によって、コレクション・ギャラリー（4F）小企画として特集展示いたします。

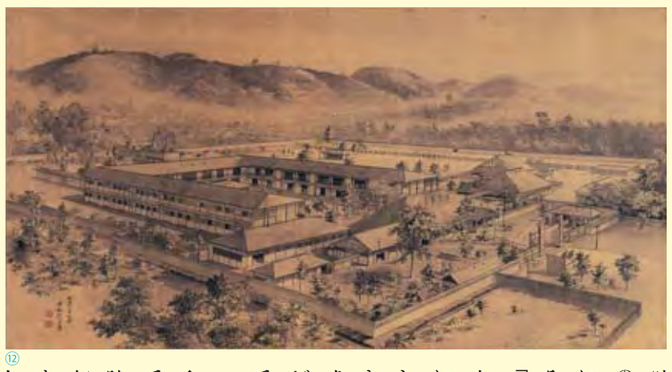
◆田村宗立（1846-1918）は、丹波国園部郡河内村（現在の京都府園部町）に生まれました。父は式部といい、宗立3歳のときに京に出て公卿中山家につかえ、後に亀岡に移ります。宗立は幼少から画才を発揮し、6歳にして画筆をとり、10歳で京都の大雅堂清亮に南画を学びます。1年ほどして六角堂能満院の大願和尚につき、仏門に入って僧侶となり、仏画の研究に没頭してゆきました。

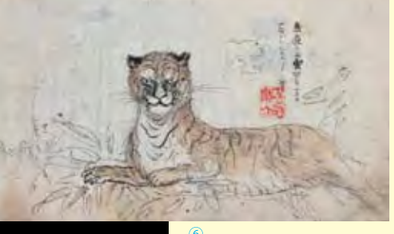
南画から仏画に転じたのは、後の門下生・伊藤快彦によれば「色彩画を描きたいため」だったようですが、見たままそっくりに描かれた絵があることを知って、ひとり工夫を凝らしながら写生に熱中します。①そして静物に陰影を描き添えることに気づいて、従来から踏襲してきた「写生」以上の描写に開眼したのでした。京都国立近代美術館には、こうした宗立の②創造の足跡を物語る《写生画帖》（1861-63年頃）が収蔵されています。この《写生画帖》が描かれた文久2（1862）年といえば、まさに高橋由一が洋書調所画学局に入局し、川上冬崖の指導を受けはじめた時にあたっています。由一は1828（文政11）年の生まれであり、宗立と由一の間には18歳ほどの年齢差があることになります。

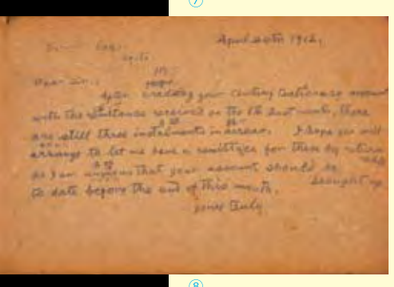
しかしながら、今日残された由一の作品のなかでもっとも早い時期の作品は、《丁髷姿の自画像》（1866-67年頃、笠間日動美術館蔵）であるといわれ、この自画像と宗立の《写生画帖》を比べれば、宗立16歳にして「写生」の腕がいかにすぐれていたかがわかるはずです。

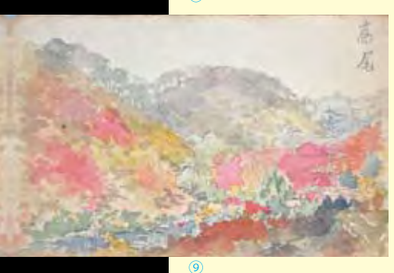
由一の代表作《鮭》（東京藝術大学蔵、重要文化財）にも「影」が描かれていますが、この作品が描かれたのは1877年頃といわれています。

◆宗立は、こうして「写生画」に没頭し、特に注目すべきは、宗立が先の《写生画帖》を描いたころ、はじめて写真を見て感動して、1865（慶応元年）には自ら写真機を買い求めていることです。そしてこの3、4年の後に、宗立は油絵の存在を知りました。まさに写真から刺戟を得て、「日本画でもなければ西洋画でもない」④一種の「写生画」に熱中する宗立の姿は、『宗立画庫』（1864-65年）や『諸記』（1865年）と題された画帖にまざまざと示されています。さらに宗立の思いは深まり、洋画家・黒田重太郎によれば、1870（明治3）年10月京都の二条離宮の西に最初の中学校がされると、「洋学を、すなわち外国語からはじめる必要を感じていた」（『京都洋画の黎明期』）て、宗立は同校にリカ人ボールドウィ修めます。宗立24歳としての地歩を確立し、「幕末京都洋画の荒蕪地に、最初の鍬を打ち込んだ」（『京都洋画の黎明期』）のでした。









【略年譜】

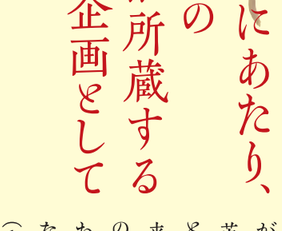
1846（弘化3）年、丹波国園部郡河内村（現在の京都府園部町）に生まれる。

本名は不明だが、月樵、十方明の号をもつ。

1855（安政2）年京都の大雅堂清亮に南画を学び、後六角堂能満院の大願和尚について仏門に入り僧侶となり、仏画の研究を行う。1865（慶応元年）に写真機を買い求める。1870（明治3）年10月に京都の二条離宮に設立された中学校に入学し、英語を学ぶ。翌年頃粟田病院（京都府立駆黴院か）に勤める。ドイツ人ランゲッグに油絵を学び、横浜にワーグマンを訪問する。1872（明治5）年の京都博覧会に出品。1881（明治14）年京都府画学校西宗で指導を行う。1889（明治22）年同校を辞職し、画塾・明治画学館を設立。1901（明治34）年の関西美術会発足に際して発起人となり、翌年の第1回展に出品する。晩年は、日本画の制作に精を出し、知恩院山内光玄院に移り、ここが終焉の地となる。

◆一方、高橋由一は川上冬崖の教えを受けたのち、1866（慶応2）年横浜に、イラストレーティッド・ロンドン・ニュースの特派員として来日したイギリス人チャールズ・ワーグマンを訪ねて入門します。由一をはじめ、五姓田芳柳・義松親子、山本芳翠など洋画を志す若者たちがワーグマンのもとに集まっていることを伝え聞いた宗立も、まだ鉄道も通じていない1872（明治5）年頃に、横浜のワーグマンを訪ね、由一や五姓田一派の人たちと交流を結んだといわれています。

そしてこの明治5年に京都博覧会が開かれ、宗立も以後出品を重ねて「洋画家」としての実績を積み、1881（明治14）年に小山三造の後を受けて京都府画学校の西宗（洋画）で指導の場が与えられました。その翌年に、博覧会場で「田村宗立油絵展」が開かれ、1889（明治22）年に画学校辞職の後、画塾・明治画学館を設立しています。1901（明治34）年の関西美術会発足に際して、宗立は発起人に名を連ね、翌年の第1回展に水彩画5点、油画21点を出品。1903（明治36）年の第5回内国勧業博覧会に、油彩による破格の屏風絵《越後海岩図屏風》（1903年、京都国立近代美術館蔵）を出品しました。



◆このように、独力で「洋画」の道を切り開いた宗立の歩みは、まさに「京都洋画の先覚者」と呼ぶにふさわしいでしょう。しかも、独自に事物の「陰影」表現を切り開き、「日本画でもなければ西洋画でもない」屏風形式による風景描写にも挑戦した宗立の姿には、わが国「洋画」黎明期そのものの状況が重なって見えてくるに違いありません。

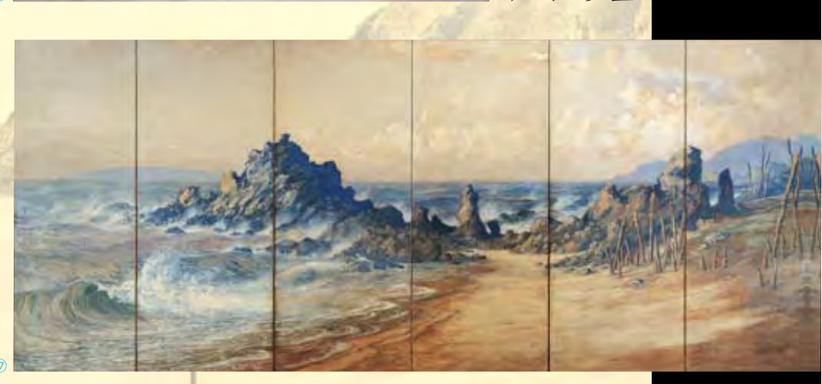
◆しかしながら、開拓者としてあまりにも駆け足で走り抜けたその晩年、宗立は知恩院山内光玄院に移り、ここが終焉の地となりました。黒田重太郎は晩年の宗立について次のように記しています。「生活はいよいよ苦しく、洋画ではどうしても立って行けぬので、また毛筆画に戻って仏画や羅漢、達磨などを描いてややもち直された様でした……京都洋画の黎明は、宗立が不遇裡に世を去る以前、すでに開始を告げていた。明治36年11月岡崎公園博覧会で開かれた関西美術第2回総会に、宗立が多年画道に尽力する功績に対し、表彰せんことを求めた浅井忠の発議が満場一致で賛同を得たのが、思うにこれが、公私の機関を通じて、宗立が彰功された唯一のものではなかったろうか。宗立はそうしてその偉業の完成を案じて浅井の手にゆだね得たことに満足して、トルストイの童話にある果樹を植える老人のように、その生涯を終えたのであった」（『京都洋画の黎明期』）と。

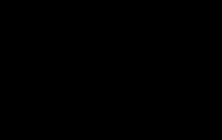
また、宗立の母が長逝した時、関西美術院の研究生たちが勉強の時間が惜しい一心から、その葬儀の参列には、総代を出してすまそうとしたところ、浅井は「大変怒って、君たちは田村先生を何と心得るといって、常の温顔とはうって変った見幕であった」とも、黒田は述懐しています。

◆以上のような宗立の活動を、当時の京都の動向に照らしあわせてみると、それが実は、「近代都市として京都が胎動する時代とすっぽり重なっていることがわかります。

すなわち1870（明治3）年に、宗立が中学校に入学したその前年、決定的な事実となった東京遷都は、二条城を中心として維新政府の首都建設に強い願いを抱いていた京都に打撃を与えましたが、京都はたな近代化に向けた施策を打ち出しました。それが「京都策」と呼ばれ、その展開は明治初年から大正年間にかけて推進され、全国に先駆けた小学校の校をはじめとする教育・文化面や、1881（明治14）年から95（明治28）年にいたる琵琶湖疏水建設、さらには京都の三大事業と呼ばれた水利、水道、道路幅と軌道敷設の完成などが行われていた時代に、宗立が生きていたことを忘れてはなりません。そして宗立も、《琵琶湖疏水工事図巻》（1886-1889年、京都市上下水道局蔵）を描き、その大事業の記録に貢献しています。

この《図巻》が描かれたほぼ10年後に、伊東忠太によって平安遷都千百年紀念祭のシンボルとして平安神宮が造営され、第4回内国勧業博覧会、宗立自身、こうした京都近代化の動向の真っただ中にいたことも、最後に





「近代洋画の開拓者 高橋由一」展

2012年9月7日（金）－10月21日（日）

主催：京都国立近代美術館、読売新聞社、NHK京都放送局、NHKプラネット近畿

協賛：日本写真印刷、あいおいニッセイ同和損保

特別協力：金刀比羅宮

協力：東京藝術大学大学院文化財保存学専攻保存修復油画研究室

［観覧料］

当日：一般1300円、大学生900円、高校生500円

前売：一般1100円、大学生700円、高校生300円

団体：一般1000円、大学生600円、高校生200円

※団体は20名以上

※中学生以下、心身に障害のある方と付添者1名は無料（要証明）

※（本料金でコレクション・ギャラリー小企画「京の由一 田村宗立 京都洋画の先覚者」もご覧になれます。）

京都国立近代美術館【岡崎公園内】

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町

電話：075-761-4111

ホームページ：http://www.momak.go.jp/

テレホンサービス（展覧会のご案内）：075-761-9900

①《写生画帖》から……1861-63年
②《写生画帖》から……1864年頃
③《宗立画庫》から……1864-65年
④《宗立画庫》から……1864-65年
⑤《諸記》から……1865年
⑥《画帖》から……1865-66年
⑦《画帖》から……1889-90年
⑧《画帖》から……1912年頃
⑨《画帖》から……1913年頃
⑩《Note Book》……1916-18年
⑪《第2回内国勧業博覧会出品解説書》……1903年
⑫《京都駆徴院図》……1885年
⑬《自画自像》（京都府博覧会賞牌授与状）……1884年
⑭《自画自像》……1884年
⑮《洋童図》……1890年
⑯《風景》……明治初年
⑰《越後海岩図屏風》……1903年
⑱《古都夕照》……明治初年（寄託作品）
⑲《地獄休日之図》……1913年
⑳《月》……明治中期頃
㉑《十六羅漢図》……明治中期頃